大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

懸垂分詞から分詞構文

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山岡, 實 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006006

懸垂分詞から分詞構文へ

山岡　實

はじめに

新英語学辞典（1982）によれば、懸垂分詞（dangling participle）とは、次の(1)の斜体部のように、「分詞構文において意味上の主語が主文の主語と異なるのに主語を表現していない分詞（句）」をいう。

(1) *Having walked two miles,* the cabin was a welcome sight.

この懸垂分詞は、通例、分詞構文の一般的規則（明示的な主語のない分詞構文は、主節の主語と同じ主語を有する）に違反しているため、慣用的な表現を除いて正しくない用法だとみなされる傾向がある。が、ここには、懸垂分詞とそれ以外の一般的な分詞構文は、同一の分詞構文という範疇に属しているが、一般的分詞構文の方が基準となる標準的なもので、懸垂分詞はその基準からはずれた非標準的なものであるという対立的な見方が歴然として存在している。が、本当に、そうであろうか。

このような従来の分詞構文に対する一般的説明は、コンテクストから切り離された単一の文内での分詞構文と主節との統語関係や意味関係を中心に行われてきたものである。そこで、本稿では、まず、懸垂分詞あるいは一般的な分詞構文が実際に生起している談話コンテクストを考慮に入れ、〈懸垂分詞あるいは分詞構文＋主節〉全体がその談話コンテクストの中でどのような「語り」の様式（伝達様式）を反映しているのかを考えてみる。そして、その考察に基づいて、懸垂分詞と一般的な分詞構文それ自体は、分詞句として同一の意味機能を果たしていることを、さらには、〈懸垂分詞＋主節〉と〈分詞構文＋主節〉は、表現様式上一つの連続性を形成し、〈懸垂分詞＋主節〉の方が〈分詞構文＋主節〉よりも原初的存在であることを示してみる。

1　懸垂分詞の場合

ここでは、〈懸垂分詞＋主節〉が、実際に生起している談話コンテクストの中で、どのような「語り」の様式（伝達様式）を反映しているのかを考えてみる。そうすることにより、懸垂分詞それ自体の意味機能も明らかになる。

まず、次の(2)を見てみよう。

(2) Facing the house, he stares up at his bedroom window. In the early morning, the room is his enemy; there is danger in just being awake. *Here, looking up, it is a refuge.* He imagines

himself safely nside.

(J. Guest, *Ordinary People*)

(家の方を向いて、彼は寝室の窓をじっと見上げる。早朝の寝室は敵だ。そこはただ目を覚ましているときは危険だ。ここから、こうして見上げていると、そこは避難場所だとも言える。彼は何事もなく家の中にいる自分を想像する。)

この事例は、登場人物 he (Conrad) が玄関の階段に座って友人の Lazenby が車で迎えにくるのを待っている間に、自分の寝室の方に目をやり、寝室についての思いに耽っていく場面である。最初の文の stares up から明らかなように、後の三つの物語文は、登場人物 Conrad の視点の支配する場面に生起していることが分かる。これら三つの物語文では、語り手は登場人物 he の視点に移入し、he がこの場面に遍在する意識の主体になっている。そうすると、斜体部の〈懸垂分詞＋主節〉全体にも、意識の主体である登場人物 he が遍在していることになり、懸垂分詞 (looking up) には、意識の主体である登場人物 he が寝室を見上げている事態が示され、主節 (it is a refuge) では、その見上げている時に感じた he の寝室についての印象が述べられていることになる。

次に、(3) を見てみよう。

(3) It was over — the moment. Against such moments ... there contrasted (as she laid her hat down) the bed and Baron Marbot and the candle half-burnt. Lying awake, the floor creaked; the lit house was suddenly darkened, ... (V. *Woolf, Mrs Dalloway*)

(終わった。その瞬間が。そのような瞬間に対して、ベッド(彼女が帽子を置いたときの)、マーボウ男爵の本、燃えさしの蝋燭が対照をなしていた。目を覚まして横なっていると、床がきしんだ。明かりのついた家が急に暗くなった。)

(3) の場合も、懸垂分詞が生起している談話コンテクストでは、登場人物 she (Mrs Dalloway) の視点が支配していることが感知できる。語り手は she の視点に移入し、登場人物 she がこの場面に遍在する意識の主体となっている。〈懸垂分詞＋主節〉全体には、意識の主体である she が遍在しており、懸垂分詞 (Lying awake) では、意識の主体である she が目を覚まして横になっている事態が示され、主節では、その時、床がきしむ音が she に聞こえたということが示されている。

さらに、次の (4) と (5) を見ておこう。

(4) He left the office and swayed along through the hallways of Wheat King. *Turning a corner, an unexpected mirror greeted him*, with an image of himself in the green-and-white polyester suit.

(W. Kotzwinkle, *Superman III*)

(4) は、登場人物 he (Gus) の視点が支配する場面である。意識の主体である登場人物 he は、事務所を出て、Wheat King の廊下をふらふらしながら通っていく。その廊下のあるコーナーを曲がると、思いがけずも鏡が目に入ってきた。その鏡には、ポリエステルのスーツを着た自分の姿が写っている、

という脈絡である。この場合、懸垂分詞 (Turning a corner) では、登場人物 he の廊下のコーナーを曲がっていることが示され、主節では、その時、登場人物 he の目に鏡が入ってきたという知覚内容が描かれている。

(5) He felt himself gently touched on the shoulder; *looking around, his father stood before him.*
(O. Jespersen, *Essentials of English Grammar*)

(5) も、登場人物 he の視点が支配する場面である。懸垂分詞 (looking around) には、意識の主体である登場人物 he が辺りをぐるっと見回していることが示され、主節では、その時、登場人物 he の目に入った事態が描かれている。

以上のように、〈懸垂分詞＋主節〉が現れる談話コンテクストには、常に意識の主体が遍在しており、懸垂分詞では、その意識の主体の「今」まさに体験している事態が表され、主節では、その事態を体験している時に感じたその意識の主体のコメント・印象あるいは知覚内容が表されている。〈懸垂分詞＋主節〉全体では、意識の主体の視点（目）から見たほぼ同時的に存在する二つの事態が表されていることになる。つまり、〈懸垂分詞＋主節〉では、意識の主体である登場人物が「今」まさに体験している事態を登場人物自身が語っているもの、いわゆる、登場人物が事態を体験すると同時に語るという内的独白が表されていると言える。従って、懸垂分詞には、〈懸垂分詞＋主節〉が反映する内的独白の一部を構成するものとして、(2) の場合、意識の主体である登場人物 he が寝室を見上げている意識を、(3) の場合、意識の主体である登場人物 she が目を覚まして横になっている意識を感知することができる。また、(4) では、登場人物 he が廊下のコーナーを曲がっている意識を、(5) では、登場人物 he が辺りをぐるっと見回している意識を読み取ることができる。

以上のように、懸垂分詞は、登場人物の自分自身に対する意識、すなわち、登場人物の、① ある対象を知覚している意識、② ある行為を体験している意識、③ ある状態にいる意識を反映していると言える。

2　一般的な分詞構文の場合

分詞構文には、主節との意味関係により、いくつかの用法が認められているが、ここでは、分詞構文が前置された場合の「時」の用法とされている場合を取り上げて考えてみる。この場合も、〈分詞構文＋主節〉全体が、実際に生起している談話コンテクストの中でどのような「語り」の様式（伝達様式）を反映しているのかを考え、さらには、分詞構文それ自体の意味機能を明らかにしてみる。

まず、分詞構文が知覚動詞の場合を見てみよう。

(6) Gasping with relief, Dorothy pressed her back against the solidly closed door. *Looking around her, she found that they were in a small, dark room, illuminated only by the light that found its way in through a high, round window.* (J. D. Vinge, *Return to OZ*)
（ほっと息をのんで、ドロシーはしっかりと閉めたドアにもたれかかった。辺りを見回していると、

自分達が小さな暗い部屋にいることが、そしてその部屋は明かりが上の円形窓からしか差込んでこないことが分かった。)

(7) He washed his left hand and wiped it on his trousers. Then he shifted the heavy line from his right hand to his left and washed his right hand in the sea ... 'He hasn't changed at all,' he said. But *watching the movement of the water against his hand he noted that it was perceptibly slower.* (E. Hemingway, *The Old Man and the Sea*)
(彼は左手を洗い、ズボンで拭いた。それから、重い綱を右手から左手に移し変え、海水の中で右手を洗った。「奴はちっとも変わっとらん」と彼は言った。が、手にあたる水の動きを見ていると、その動きがかなり遅くなっていることに気づいた。)

(6)・(7)の分詞構文が生起している談話コンテクストをよく観察してみると、(6)では、登場人物 Dorothy の視点が支配し、(7)では、登場人物 he の視点が支配していることが分かる。語り手は、それぞれ、Dorothy・he の視点に移入し、Dorothy・he がその場面に遍在する意識の主体になっている。分詞構文では、(6)の場合、意識の主体である Dorothy が今まさに辺りを見回している事態が示され、(7)の場合、意識の主体である he が今まさに手に当たる水の動きをじっと見ている事態が示されていることになる。

一方、主節では、(6)・(7)とも、視点が主語の名詞句にあることを示唆する認識動詞 (find・note) が用いられているため、登場人物の視点から状態を認識していること、つまり、登場人物 Dorothy・he が認識行為を現実に体験していることが示されている。〈分詞構文＋主節〉全体では、おおむね、意識の主体である登場人物が知覚しているうちにある認識に至る、という登場人物自身の今まさに進行している認識過程が示されていることになる。が、主節では、意識の主体である登場人物を三人称代名詞 she 及び he を用い、動詞は過去時制 (found・noted) を用いている点に注目しなければならない。三人称代名詞を用いることによって、この場面に遍在している意識の主体を客体化している点に、また過去時制の動詞を用いることによって、意識の主体の認識行為を外側から客観的に対象化している点に、語り手の存在を感知することができる。この場合、〈分詞構文＋主節〉は、登場人物自身の今まさに進行している認識過程を語り手が語っているという「語り」の様式を反映していることになる。

とは言え、分詞構文には、語り手の声が聞こえなくなった非定形 (Looking・walking) が用いられているため、今まさに展開している認識過程の一部を示すものとして、(6)の場合、意識の主体である登場人物 Dorothy が辺りを見回している意識を、(7)の場合、意識の主体である登場人物 he が手に当たる水の動きをじっと見ている意識を感じ取ることができる。

次に、分詞構文の動詞が行為動詞と「空間における位置」を表す動詞 (lie, sit, stand など) の場合を見ておこう。

(8) Fern went back inside ... as she stumbled through Pearl's room and across the hall, she could hear flames crackling overhead. She could also hear King whining. *Moving toward the sound,*

she came upon Howard lying on the floor. *(Reader's Digest)*
(ファーンは再び部屋の中に入った。彼女はよろめきながらパールの部屋を通り抜け、ホールを横切ったとき、頭上で炎がパチパチ音をたてているのが聞こえた。また、キングがくんくん鳴いている声が聞こえた。その声のする方へ動いていくと、床の上に横たわっているハワードにでくわした。)

(9) Nick trailed his hand in the water. It felt warm in the sharp chill of the morning. *In the early morning on the lake sitting in the stern of the boat with his father rowing, he felt quite sure that he would never die.* (E. Hemingway, 'Indian Camp' in *The Snows of Kilimanjaro*)
(ニックは手を水の中に入れたまま、水を切っていった。朝の厳しい寒さの中で水は暖かく感じられた。早朝の湖の上で父が漕いでいるボートの船尾に座っていると、決して死にはしないと確信をもった。)

この場合も、分詞構文は、登場人物の視点が支配する談話コンテクストに生起しており、Fern・Nick がその場面に遍在する意識の主体になっていることが分かる。(8) の分詞構文では、意識の主体である Fern が King の声のする方に今まさに動いている事態が示され、(9) の分詞構文では、意識の主体である Nick が今まさに父親が漕いでいるボートの船尾に座っている事態が表されている。

一方、主節では、視点が主語の名詞句にあることを暗示する動詞 (came) および心的動詞 (felt) が用いられているため、(8) の場合、登場人物 Fern の視点から出来事を体験していることが、また、(9) の場合、登場人物 Nick が心的行為を現実に体験していることが示されている。(8) の場合、〈分詞構文＋主節〉全体では、意識の主体である登場人物 Fern が King の声のする方に動いていくと、Howard に出くわしたという今まさに体験している一連の出来事が示されていることになる。また、(9) の場合、〈分詞構文＋主節〉全体では、意識の主体である登場人物 Nick が父親の漕いでいるボートの船尾に座っていると、死にはしないと確信したということ、つまり、ある状態にいると、ある心的状態になったという今まさに進行している心の中の動きが表されていると言える。

が、主節では、三人称代名詞 she 及び he を用いて、この場面に遍在している意識の主体を客体化し、過去時制の動詞を用いることにより、意識の主体の行為及び心的行為を客観的に対象化している点に、語り手の存在を感知することができる。この場合、〈分詞構文＋主節〉は、(8) の場合、登場人物自身の今まさに体験している出来事を語り手が語っている、(9) の場合、登場人物の今まさに進行している心の中の動きを語り手が語っているという「語り」の様式を反映していることになる。

が、分詞構文には、語り手の声が聞こえなかった非定形（Moving・sitting）が用いられているため、(8) の場合、意識の主体である登場人物 Fern が Koward に出くわすまで King の鳴き声のする方に近づいていく意識が感じられ、(9) の場合、Nick がボートの船尾に座っている意識が感じ取れる。

このように、「時」の用法を表すとされている分詞構文は、登場人物の、①ある対象を知覚している意識、②ある行為を体験している意識、③ある状態にいる意識を反映していると言える。

3 〈懸垂分詞＋主節〉と〈分詞構文＋主節〉の連続性について

以上のように、〈懸垂分詞＋主節〉及び〈分詞構文＋主節〉が、実際に生起している談話コンテクストの中でどのような「語り」の様式（伝達様式）を反映しているのかを検討した。その結果をまとめると、次のようになる。

(i)〈懸垂分詞＋主節〉の場合：

◇懸垂分詞は、意識の主体が今まさに体験している事態を表し、主節は、その事態を体験している時に感じたその意識の主体のコメント・印象あるいは知覚内容を表す。

◇〈懸垂分詞＋主節〉の「語り」の様式；

意識の主体である登場人物が今まさに体験している事態を登場人物自身が語っているもの、いわゆる、内的独白を表す。

(ii)〈分詞構文＋主節〉の場合：

①分詞構文の動詞が知覚動詞で主節が認識動詞の場合；

◇分詞構文は、意識の主体が今まさに知覚している事態を示し、主節は、意識の主体が認識行為を現実に体験していることを示す。

◇〈分詞構文＋主節〉の「語り」の様式；

意識の主体である登場人物が知覚しているうちにある認識に至るという今まさに進行している認識過程を語り手が語っているものを表す。

②分詞構文及び主節の動詞が共に行為動詞の場合；

◇分詞構文は、意識の主体が今まさに動いている事態を示し、主節は、意識の主体が今まさに事態を体験していることを示す。

◇〈分詞構文＋主節〉の「語り」の様式；

意識の主体である登場人物がある動作を行っていると、ある事態を体験したという今まさに体験している一連の出来事を語り手が語っているものを表す。

③分詞構文が「空間における位置」を表す動詞で主節が心的動詞の場合；

◇分詞構文は、意識の主体が今まさにある状態にいる事態を示し、主節は、意識の主体が心的行為を現実に体験していることを示す。

◇〈分詞構文＋主節〉の「語り」の様式；

意識の主体である登場人物がある状態にいると、ある心的状態になったという今まさに進行している心の中の動きを語り手が語っているものを表す。

また、懸垂分詞の場合、内的独白の一方を表すものとして、分詞構文（「時」の用法を表す）の場合、今まさに進行している認識過程、一連の出来事、心の中の動きの一部を示すものとして、両者は、物語テクストの特定の談話コンテクストにおいて同じ意味機能（登場人物の、①ある対象を知覚している意識、②ある行為を体験している意識、③ある状態にいる意識を反映する）を果たし

ていることが分かる。さらに、この懸垂分詞と分詞構文の意味機能は、一般化して示すと、意識の主体である登場人物が今まさにある事態を体験している意識を反映することにある、と言える。

このように考えてくると、〈懸垂分詞＋主節〉と〈分詞構文＋主節〉は、表現様式上、一つの連続性を形成していることが分かる。もう一度、(2)・(3)・(6)・(7)の斜体部のみ以下に挙げておく。

(2) *Here, looking up, it is a refuge.*

(3) *Lying awake, the floor creaked.*

(6) *Looking around her, she found that they were in a small, dark room, . . .*

(7) *watching the movement of the water against his hand he noted that it was perceptibly slower.*

〈懸垂分詞＋主節〉を表している(2)・(3)と〈分詞構文＋主節〉を表している(6)・(7)との「語り」の様式を比較してみると、その違いは歴然としている。(2)・(3)の〈懸垂分詞＋主節〉と(6)・(7)の〈懸垂分詞＋主節〉は、共に、登場人物の視点の支配する場面に生起しているので、「誰が見ているのか」という点では、見ている主体は登場人物であり、共通している。が、「誰が語っているのか」という点では、異なっている。〈懸垂分詞＋主節〉の場合、(3)のように、主節に過去時制の動詞が用いられる場合[1]が見られるが、この場面には意識の主体である登場人物が遍在しており、語っている主体は登場人物自身であり、意識の主体である登場人物が体験している事態を登場人物自身が語っているものを反映している。一方、〈分詞構文＋主節〉の場合、問題の場面に遍在している意識の主体を三人称代名詞で客体化し、さらに登場人物の認識、心的状態などを過去時制の動詞を用いて客観的に外側から対象化して表している点に、語り手の存在を感知することができる。〈分詞構文＋主節〉の場合、語っている主体は語り手であり、登場人物が体験している事態を語り手が語っているものを反映していることになる。当然のことながら、その分、〈分詞構文＋主節〉の方が、〈懸垂分詞＋主節〉構文よりも語り手の介入度が高くなっている。その証拠に、(6)の主節の she found that と(7)の主節の he noted that を削除してみれば、よく分かる。

(10) *Looking around her, they were in a small, dark room, . . .*

(11) *watching the movement of the water against his hand it was perceptibly slower.*

(10)・(11)は、(2)・(3)と同じ内的独白を反映する〈懸垂分詞＋主節〉の表現形式になっていることが分かる。

そうすると、「はじめに」で述べたような、分詞構文の方が標準的用法で、懸垂分詞は非標準的用法であるという従来の説明は、妥当なものではないことが分かる。懸垂分詞と分詞構文は、分詞句として同じ意味機能を果たしているばかりでなく、主節を含めた表現形式全体で見ると、〈懸垂分詞＋主節〉と〈分詞構文＋主節〉には、語り手の介入度の違いが存在し、表現様式上、一つの連続性が形成されている。〈懸垂分詞＋主節〉の方が、〈分詞構文＋主節〉よりも、語り手の介入度が低く、語り手の介入度の度合という点において、表現様式上、原初的存在であると言うことができる。[2]

[注]

1 ここでは、語り手が登場人物の発話時点に完全に移動していないことを示唆している。

2 さらに、〈懸垂分詞＋主節〉と〈分詞構文＋主節〉、それぞれの間にも、微妙に語り手の介入度に差異が検出でき、一つの連続性が見られる。まず、〈懸垂分詞＋主節〉（上の事例 (2) ～ (5)）の方から見てみよう。この表現形式は、内的独白を反映するが、 英語の物語の場合、内的独白を反映すると言っても、(3)・(4)・(5) のように、主節において過去時制を用いたり、さらに (4)・(5) のように、意識の主体である登場人物自身を him や his と三人称代名詞を用いている点に注目しなければならない。過去時制とは、出来事を物語る現在（発話時点）から見た過去のものとして表すという点に、三人称代名詞とは、登場人物を客観的に対象化するという点に、語り手の存在を感知できる言語的特徴である。(3) では、主節に過去時制が用いられている点に、(4) では、さらに、主節に意識の主体を目的格 him を用いて客体化している点に、(5) では、さらに、主節に意識の主体を所有格 his と目的格 him 両方を用いて客体化している点に、それぞれ、語り手の存在を感知することができる。従って、(2) のような〈懸垂分詞＋主節〉を 100% の内的独白性を反映する表現形式とすると、(3) → (4) → (5) の順で語り手の介入度の度合が高くなり、それに応じて内的独白性の稀薄な表現形式になっていると言える。

次に、〈分詞構文＋主節〉（上の事例 (6) ～ (9)）の方を見てみよう。この表現形式は、登場人物の今まさに進行している認識過程や心の中の動き、今まさに体験している出来事を表すが、分詞構文や主節において用いられる三人称代名詞及び過去時制に、語り手の介入度の差が見られる。(6) を基準にして考えると、まず、(6) の場合、分詞構文における her により、語り手が登場人物 she の視点に完全に移入していないことが分かる。主節では、この場合、遍在している意識の主体を she と客体化している点に、また登場人物の認識を過去時制の動詞 found と that 節を用いて客観的に対象化している点に、語り手の存在を感知することができる。次に、(7) は、(6) とほとんど同じことが言える。ただ (6) では、分詞構文において意識の主体を目的格の her を用いて客体化しているのに対して、(7) では、意識の主体を所有格 his を用いて客体化している点が異なる。所有格 his よりも目的格 her の方に、表現主体である語り手の注意がより向けられているという点において、その分、(6) の方が (7) よりも語り手の介入度の高い構文になっている。次に、(9) の場合はどうであろか。(9) は、よく見ると、(6) とほぼ同じことが言える。(9) では、主節において意識の主体の心の中の様子を過去時制の動詞 felt を用いて表しているばかりでなく、quite sure という蓋然性を示す語句を用いている点に、(6) よりも語り手の介入度が若干高くなっていると言えよう。最後に、(8) の場合はと言うと、(7) と比較してみると、主節に意識の主体を she と客体化している点、意識の主体の行為を過去時制の動詞を用いて客体化している点は同じであるが、分詞構文に意識の主体を客体化している三人称代名詞がない点が異なる。その分、(8) の場合の方が、語り手の介入度が低い構文になっている。以上のように、〈分詞構文＋主節〉の場合、(8) → (7) → (6) → (9) の順で語り手の介入度の度合が高くなっていると言える。

このように、〈懸垂分詞＋主節〉と認知される様々なタイプの表現形式から〈分詞構文＋主節〉と認知される様々なタイプの表現形式に至るまで、語り手の微妙な介入度の漸次的違いが存在し、両者を構成する一連の表現形式の間には一つの連続性を形成していることが分かる。

参考文献

Jespersen, O. 1974. *Essentials of English Grammar*. George & Unwinn.

Swan, M. 1980. *Practical English Usage*. Oxford University Press.

Thompson, S. A. 1983. "Grammar and Discourse: the English Detached Participial Clause." In F. Klein-Andreu (ed.) *Discourse Perspectives on Syntax*, 43-65. Academic Press.

大塚高信，中島文雄監修．1982. 『新英語学辞典』研究社．

山岡實．1992. 「談話分析からテクスト理解へ」安井泉（編）『グラマー・テクスト・レトリック』

くろしお出版,137-159.
山岡實．2000.『「語り」の記号論—日英比較物語文分析』 松柏社．
山岡實．2001.「〈懸垂分詞＋主節〉構文と内的独白」『英語青年』 研究社，147巻，9号，578-579.

From 'Dangling Participle' to 'Participial Construction'

Minoru Yamaoka

'Dangling participle' tends to be usually regarded as the incorrect usage except idiomatic expressions because it is against a general rule of 'participial construction' ('participial construction' with no explicit subject has the same subject as that of the main clause). In this respect there unmistakably exists an opposing viewpoint that 'dangling participle' and other general 'participial construction' fall under the same category of 'participial construction,' but the latter is standard, whereas the former is nonstandard.

So, in this paper, by considering the discourse context in which 'dangling participle' or other general 'participial construction' really occurs, I first explore what type of narrative modes the entire 'dangling participle or participial construction + main clause' reflects in the discourse context. And then, on the basis of the consideration, I attempt to show that 'dangling participle' and general 'participial construction' themselves perform the same function as participial phrases. Finally, I reveal that 'dangling participle + main clause' and 'participial construction + main clause' form a continuum in the mode of expression, and the former is more original than the latter.